



誰がために鐘は鳴る ～祈りの音の風景～

重く厚みのある鐘の音が静寂につつまれた夜に響いてきました。もうすぐ新しい年が始まります。

6世紀の初めごろ仏教とともに伝えられたとされる梵鐘とその音色は、長い時を経て日本の風景に溶け込んできました。鐘の音は寺で行われる儀式で使われるだけでなく、中世には鐘の音がこの世とあの世、人と神仏の世界をつなぐ役割も果たしていたと言われます(註2)。江戸時代には時刻を知らせる「時の鐘」としても広く普及しました。大晦日の風物詩としておなじみの除夜の鐘も江戸時代からの伝統のように思われますが、実は近代以降に広まったとする研究があります(註3)。地域や宗派によつて「鬼門を封じる」や「身を清める」、「煩惱を消す」などさまざまに解釈されています。

市内に残る最も古い梵鐘は加賀美山法善護国寺の銅鐘(註4)です。年号などの銘はありませんが、特徴から中世の作と考えられています。中央には胎蔵界大日如来を表す梵字が施されています。縦帯に梵字を持つ梵鐘は全国で三口しか残されておらず、特別な梵鐘であることがわかります。五百年以上も加賀美を守ってきたこの鐘は、今は9月の虚空蔵菩薩の祭典と大晦日(註5)のみ参拝者によつて撞かれて、その音を響かせます。



胎蔵界大日如来を表す梵字

江戸時代に各寺院に普及した梵鐘ですが、日中戦争・太平洋戦争時の昭和16年以降物資不足を補うため全国に「金属類回収令」が出されると、家庭の鍋釜などとともに多くの寺院から供出されてしまいました。それぞれの地域から「音の風景」が失われたのです。しかし

戦後には、人々が復興を目指す中、梵鐘も各地域で求められました。八田山長谷寺に祀られている「平和の鐘」もその一つです。故中島弘智住職は戦争で亡くなった人々を弔い、これからの恒久的な平和を願つて、昭和28年4月から錫杖を片手に托鉢を始めました。旧11ヶ村五千五百戸をほぼ1年かけて歩き、地域の人々の思いが込められた多くの浄財が集まりました。こうして新たに鑄造されたのが、内側に戦没者の名前が刻まれた「平和の鐘」です(註5)。現在市内に響く多くの梵鐘は、このような地域の人々の願いを受けて戦後に再生された鐘なのです。



長谷寺平和の鐘

吐く息が真っ白になり除夜が深まる中、深く響き、余韻を残す鐘の音。一撞き一撞きに、その人の願いや希望、弔いなどさまざまな想いが託されています。その音は聴いた人の心にも何かを残し、遠く離れた人と人の心をつなぐものであるのかもしれない。新年が穏やかに等しく平和であることを祈念しています。

写真／文 文化財課 撮影場所：加賀美山法善護国寺

註4 山梨県指定文化財鐘樓付銅鐘

註5 「平和の鐘」は後に破損したため現在は別の梵鐘が使われています。

註1 メインタイトルはイングランドの詩人 John Donne の「瞑想」第17より。

註2 笹本正治 2008 『中世の音・近世の音 鐘の音の結ぶ世界』

註3 浦井祥子 2006 「江戸の除夜の鐘について」『江戸町人の研究 第六巻』西山松之助編